

国際連合による事業化プロセスから見る丹下健三「ルンビニ開発計画」

- 1972 年マスタープラン大綱完成まで -

Kenzo Tange's "Lumbini Sacred Garden -Birthplace of Buddha" through the process as the UN project

- until the completion of final outline design for Lumbini in 1972 -

森 朋子*・黒瀬武史**・西村幸夫***

Tomoko Mori*, Takefumi Kurose**, Yukio Nishimura***

This paper aims to reconsider Kenzo Tange's "Lumbini Sacred Garden -Birthplace of Buddha" through the process as the United Nation's project. The research method is based mainly on the reports' review in order to understand its very early stage, especially from the United Nations Archives and the ex-stuffs of Kenzo Tange & Urtec at those days. The study divided the early stage into three stages, 1)the project framing period, 2)the period of design outline by Kenzo Tange and 3)the final design period, and focused on the 1st and 2nd period. As a result, the study clarified that the Kenzo Tange's "Lumbini Sacred Garden -Birthplace of Buddha" was a part of the regional master plan in the UN mission report (Kobe report) in 1968. It also clarified the planning intention of the framework through the original idea of design before Kenzo Tange.

Keywords: Lumbini, Kenzo Tange, United Nations, Development Plan, World Heritage

ルンビニ, 丹下健三, 国際連合, 開発計画, 世界遺産

1. はじめに

1-1. 背景・目的

丹下健三が、当時のウ・タント国連事務総長から直々に釈迦生誕の地ルンビニの荒廃を聞き、この「聖地を永久に残すためのプラン」¹⁾を依頼されたのは1969年であった。丹下が「目標の石柱の近くに降りたつと、何の家屋らしいものもない」¹⁾と表現したほどに未開の地(写真1)が半世紀を経て大きく姿を変えて来た。丹下建三・都市・建築設計研究所(以下、丹下)による1×3マイルの「ルンビニ開発計画」(以下、丹下プラン)は未完成だが、釈迦生誕の地は、1997年に世界文化遺産に登録され、永久に残すという一つの使命は果たされた。近年では周辺地域に点在する遺跡群の発掘も進み、暫定リストにあるティラウラコット遺産の世界遺産登録も現実味を帯びてきた。

筆者らは、2010年より外務省ユネスコ信託基金によるユネスコ・カトマン

ズ事務所の「世界遺産ルンビニ遺跡保全強化事業」に関わり、丹下プランを通して遺跡保存と開発計画の狭間に立ち、解決案を模索してきた。近年では、特に約17km東に位置するバイラワ空港の国際空港化工事が進み、周辺では幹線道路の拡幅と、大規模工場やホテル建設が進んでいる。丹下プラン内部でも、当時描かれていない大規模ホールの建設や、各国から寄贈された仏像の建立等、統制のない変化が著しい状況にある。



写真 1. ルンビニ聖園周辺：1969年撮影
(出典：参考文献10)

これまで丹下のルンビニ開発計画に関し、小野²⁾は地域コミュニティの視点からの課題を、Li³⁾は丹下による設計計画変遷を整理し、筆者らもルンビニ遺跡を文化遺産保護の視点から開発規制を行う一事例として⁴⁾、また丹下プラン前の段階から丹下プラン完成までの一連の事業化プロセスを整理し、途中で地域の開発計画の視点が後退したことを明らかにした⁵⁾。本稿は、この一連の事業化プロセスから、具体的に明示された空間計画に着目して丹下プランの位置付けを明らかにし、そこから丹下プランの全体枠組みに対する計画意図を捉えることを目的とする。

1-2. 研究方法

ルンビニの開発事業は、1967年4月ウ・タント国連事務総長の現地訪問が契機となる。1978年の丹下による最終計画レポート完成を丹下プランの到達点と置き、事業化が模索され各ミッションが実行された時期(①事業化構想期)、丹下が計画大綱を構想した時期(②マスタープラン構想期)、丹下による最終計画を検討した時期(③マスタープラン完成期)の3つに区分した(表1)。特に、1969年12月の国連ミッションから丹下が関わっており、この報告書を第1期と第2期の転換点と捉え、本稿は、国際連合により事業化を模索した初動期である第1,2期を対象時期とする。

表 1. 国連による事業化にて設定した3つの計画段階

年月	計画立案に関する主な出来事	計画段階
1967	4 国連事務総長ウ・タントのルンビニ訪問	①事業化構想期
	10 ネパール政府国連ヘルンビニ事業支援要請	
	12 国連ミッション(河辺ら)	
1968	4 ユネスコミッション(ボラコ)	①事業化構想期
	12 国連ミッション(岡田)	
1969	12 国連ミッション(オルデン・松下)	②マスタープラン大綱策定期
1970	2 ルンビニ開発委員会の発足	
	3 ルンビニ開発委員会によりLumbini冊子発行	③マスタープラン完成期
1971	8 第1回アドバイザリー会議、東京	
1972	3 第2回アドバイザリー会議、カトマンズ	
	7 丹下健三マスタープラン大綱完成	
~		
1978	3 丹下健三マスタープラン最終レポート完成	③マスタープラン完成期

*正会員・札幌市立大学 (Sapporo City University)

**正会員・九州大学 (Kyushu University)

***正会員・國學院大学 (Kokugakuin University)

対象資料は、国連本部 UN Archives に所蔵されているルンビニ開発計画関連資料、特に調査報告書を主対象とする。また、当時の担当者や関係者から入手した計画案、報告書、雑誌や作品集に発表された図面及び説明文、さらに当時の担当者へのヒアリング内容も補足的に用いた。まず各時期に関して本稿が扱う資料を示す。

(1) 第1期 (1967年から1969年) に関する資料

先に第1期と第2期の転換点とした1969年12月の国連ミッション報告書と、その報告書が参考した3つの報告書の合計4つの報告書を対象資料とする。

- 1) The Report of the United Nations Mission for the development of Lumbini, 18 December 1967 – 9 January 1968⁶⁾ (以下、河辺レポート)
- 2) Development of cultural tourism: Nepal - (mission) April-May 1968⁷⁾ (以下、ユネスコレポート)
- 3) A comprehensive report on the Lumbini Development Project of the抜粋版としての A Brief on the Lumbini Development Project, April 1969⁸⁾ (以下、1969年レポート)
- 4) Report for the Lumbini Development Project, December 1969⁹⁾ (以下、オルチン・松下レポート)

(2) 第2期 (1970年から1972年) に関する資料

- 1) LUMBINI, 釈迦生誕の地¹⁰⁾ (以下、冊子)
- 2) Lumbini Development Project, report of the Advisory Panel¹¹⁾ (以下、第1回アドバイザー会議レポート)
- 3) Final Outline Design for Lumbini¹²⁾ (以下、マスタープラン大綱)

2. 1967年から1969年までの事業化構想期 (第1期)

1-2. (1) にて明記した4つの報告書について、①調査委託事項、②空間計画に対する提案事項に着目した提案内容の図化による整理を主に行い、考察を加える。

2-1. 河辺レポート

本レポートは、国連ミッションとして、ルンビニ開発計画に向け初めて実行された調査の報告書である。河辺吉 (交通専門家) をリーダーに、交通、巡礼や訪問客の滞在関連など観光、水光熱資源に関し、3名の専門家による現地調査が実行された。

(1) 調査委託事項

ルンビニを宗教・観光の中心地として開発するための交通・水光熱・宿泊施設など基盤計画の立案を委託した。

(2) 空間計画への提案

現地調査結果とともに、これまでインドからのアクセスで孤立していたカピラバスツ (ティラウラコット遺跡所在)・ルンビニ・バイラワを東西軸に通す道路 (以後、提案道路) によって包含した「ルンビニ複合体—開発のための計画」を提案している。東部の空港近接のバイラワを地域交通や一般サービスなど、ルンビニとカピラバスツを補完する拠点都市に位置付けた、ルンビニ地域のマスタープランである (図1)。また、以下の要点が記されている。

a) 本地域の開発課題と、ネパールの地域開発に合致する手

法による農業や小規模産業に係る先駆的事業の可能性を明らかにすること。

- b) 観光関連施設・病院・行政・水光熱・通信など統合された小規模拠点をルンビニに、その他より一般的なサービス施設をバイラワへ整備する。
- c) 植樹した道路景観を形成する。(カピラバスツ・バイラワ)
- d) 直近ではルンビニとバイラワに宿泊・医療等施設が必要。
- e) バイラワを、ルンビニとカピラバスツのための一般的商業・行政サービスの拠点都市とする。

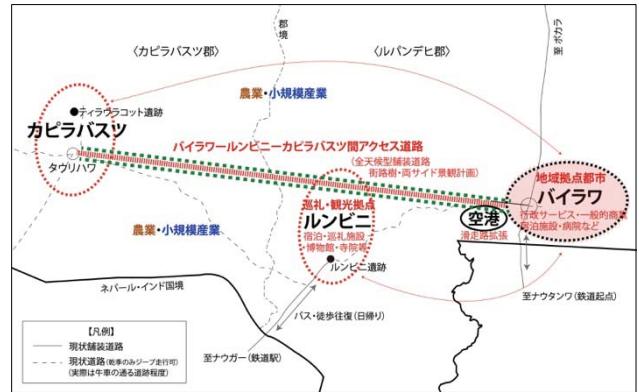


図1. ルンビニ地域マスタープラン (文献6参照し筆者ら作成)

2-2. ユネスコレポート

J.C. Pollaco によるユネスコミッションとして、ネパール国内を現地視察して提出されたレポートである。河辺は、国連ミッションのネパールからの帰路にパリのユネスコに寄り、考古学遺跡の保全と発掘に関し協議している⁶⁾。それを受けて実行された調査報告と考えられる。

(1) 調査委託事項

ネパール政府へ国内歴史的モニュメントを活用した観光促進の助言、プログラム策定へ関連部署支援、観光活用した文化的・経済的発展のための具体的行政管理手法の助言。

(2) 空間計画への提案

報告書本文は、主に観光に対する政府の支援や仕組みなどが中心だが、補足資料には、「ルンビニ地域への観光開発計画」とする具体的な提案があった (図2)。

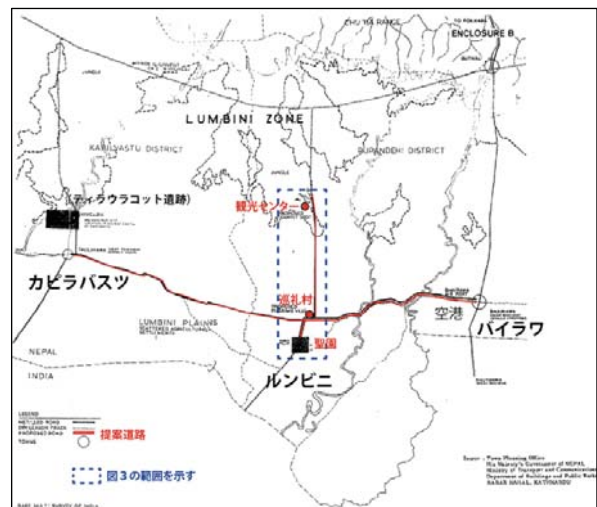


図2. ルンビニ観光開発計画図 (出典: 参考文献7添付図に筆者ら加筆)

提案は河辺レポートの要約に続いており、河辺案を踏まえルンビニ部分を具体化した内容と捉えられる(図3)。

1マイル四方の聖園、特にアショカ王石柱を基点に、巡礼村、観光センターを離して北部に配置し、提案道路で巡礼村を分岐後、聖園までを観光から巡礼へ段階的に構成し、居住と純商業用途を禁止し、聖園の北外部にバスターミナル等交通拠点を置く。最北部の観光センターは、自然豊かな森・湖に位置した高所得者層向けのリゾート地である。

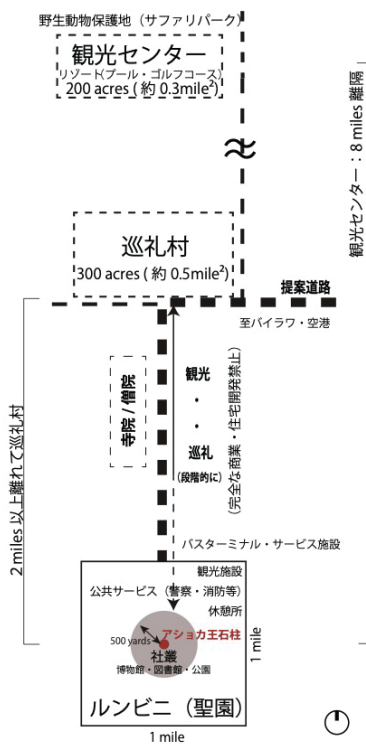


図3. Pollaco 案 (文献7 参照し筆者ら作成)

聖園部は、明治神宮・伊勢神宮を例して石柱を囲む社叢を配置し、現存建物を撤去して博物館や図書館以外は建設禁止とし、これら解体・建設前に、遺跡の発掘と保護を行う。社叢以外の聖園部は、観光や警察・消防などのサービス施設を、景観考慮し地元材を用いて建設する。巡礼村には、所得者別の宿泊施設の建築計画図を添付しており、Pollaco がこの時点でかなり具体的なイメージを描いていたことがわかる。また、聖園・巡礼村の詳細計画の依頼候補に、丹下健三の名をあげている。

2-3. 1969年レポート

本レポートは、後のオルチン・松下レポートにある国連カトマンズ事務所長 Y.J. Joury による“A comprehensive report on the Lumbini Development Project”とあるものの抜粋版と思われる⁽¹⁾。オルチン・松下レポートで、これまでの3つの報告書の中で一番自分たちの考えに近い内容であると記されており、この後の計画に影響したことが窺われる。

表2. 1969年レポートから整理した関連事項の年表

年月	国連・ネパール政府 主な出来事	1969年レポートに記載されたプロジェクト(数字は原文英文書通り)
1967	4 ウ・タントのルンビニ訪問とネパール政府への開発提案	
10	ネパール政府副総理・外務大臣のウ・タント面談	
	一 国連へ正式に援助要請	
12	国連ミッション実行一河辺ら3名	
1968	1 河辺レポート完成	
8		
9	ネパール政府一 国連へ特別基金要請	1 ドイツによるルンビニ北部ガンダカイ開発事業3年計画発動
	一 地域計画、コミュニティ開発、農学、建築の4分野専門家要請	6 ルンビニの飲料水確保に向けた地下水テスト(〜1969.5)
1969	初 国連本部は目的が不明確として、農業開発プロジェクト延期	4. ネパール政府国連支援のもと都市計画局発足、カトマンズ盆地地域計画に注力、他の分野にスタッフ配置難
3		5. 国連よりF.E.オカダ氏がネパール着任(コミュニティ開発部門)
1970-		3. 国連の農業開発プロジェクト現地訪問一時期尚早 2. 1970-1975(第4期)計画者選定(3地域(ルンビニ含)集中開発)

1967年以降の国連と政府の間答より、地域の農業開発に係る早期事業化を諦め(表2)、ルンビニ開発計画は、1)ルンビニ聖園、2)巡礼者村、3)バイラワルンビニ道路、4)バイラワ空港拡張の4事業に整理された。3,4)は、ネパール政府

によって計画が進められていることから、残る1,2)に外部支援が必要とされた。これに対し、国連は支援を表明し、1,2)の聖園と巡礼村が全体を統合する計画として1×3平方マイルを規制エリアに、聖園・巡礼村間には農地・提案道路で区分した(図4)。

また、一案として国連による国際コンペ、特に仏教国からの支援を期待し、事業化後もネパール政府の財政・人材面から見て長期に及ぶ国際支援が必要となることも強調されている。ここで国連は、1970年に経済発展した仏教国の一つである日本で開催される万国博覧会にて、宣伝を協力できることに触れている。

2-4. オルチン・松下レポート (1969年12月)

考古学者でイギリス・ケンブリッジ大学インド学講師 Frank Raymond Allchin (以下、オルチン)は、ユネスコからの推薦により、丹下健三・都市・建築設計研究所上級所員の松下一之は国連からの推薦による人選であった⁽²⁾。前書きには、松下が調査後に東京で丹下本人から助言を得て、最終レポートに反映しているとある。丹下は、ここからルンビニ開発計画に関わることになる。

(1) 調査委託事項

ルンビニ開発を正しい方向に導くことを使命に、聖園・巡礼村・バッファゾーンで構成される3平方マイルを対象に、以下2点を目的にした約2週間の現地調査である。

- 1) 国連事務総長が、ルンビニ開発に興味を持つ特に仏教国に対し、二国間支援を促す要請に役立つ、巡礼者施設数・景観・修繕工事など概算含むデータの収集。
- 2) バイラワルンビニ道路踏査

同時に、1970年3月15日までに発行予定の小冊子に利用可能な一般情報や視覚的説明用図面の提出が求められた。

(2) 空間計画への提案

1969年案から基本コンセプトの具体化が見られる(図5・表3)。空間計画の変化として、聖園の領域が、アショカ王石柱の近傍の社叢(図3)から1×1マイルの全領域に広がり(図6)、1×3マイルの中心に僧院ゾーンを挿入し、聖園とルンビニバイラワ道路に軸を通し、1マイル四方をグリッドに1×3から3×3マイルへ大きく捉え、周辺から洪水対策・土手としてバッファゾーンとした(図5)⁽³⁾。

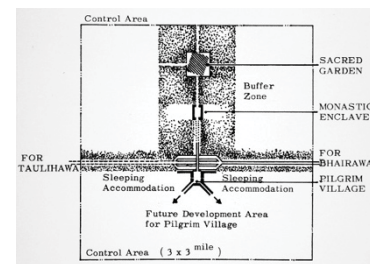


図5. オルチン・松下案

(出典：文献9付録図、方位南北逆)

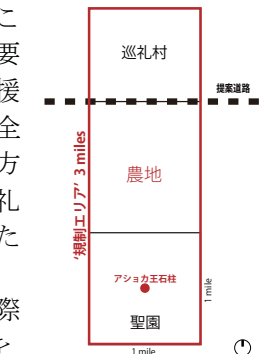


図4. 1969年案

(文献8 参照し筆者ら作成)

図6. オルチンのスケッチ⁽⁴⁾

(図の方位は南北逆)

表3. 基本コンセプト一覧 (本文4章より抜粋)

第4章 基本コンセプト	
1)概要	古代の状況がどうであれ、現在聖園は全く見向きもされていない状況にあり、ルンビニ開発計画は、人類全てに快適で、幸福で、またヒンズー教徒と仏教徒が調和して暮らすネパールにおいて決して宗教上の偏見があってはならないといった、建築家や造園家に非常な難題を求めたもの。また、巡礼者は聖園と周辺地域をつなぐ地元開発の中心的位置付けと見なす。ネパール計画局聖園を南に3マイルの規制エリア想定→プロジェクト用地
2)主要素	1) ルンビニバイラワ道路、2) 聖園、3) 聖園近く僧院、4) 農地・緑地によるバッファゾーン、5) 巡礼者村
3)道路	規制エリアでのバイラワルンビニ道路位置は、マスタープランに従う
4)聖園	静寂で普遍性あり、ブッダ生誕の地と明確にわかる宗派・偏りのないデザイン
5)僧院	聖園と巡礼者村間の聖園北に寺院・僧房建設エリアとし祈禱・居住など多様な建設許可、博物館(発掘された遺物展示)や仏教情報センター・仏教学校等
6)バッファゾーン	外部との遮断を目的、一般的な農地や植林、駐車場・露店等、聖園の両サイドは土手として位置付け雨期の水対策必要、野外博物館的に周辺農村保存
7)巡礼者村	巡礼者や観光客向けの宿泊施設のみならずサービス産業や周辺の田園風景を享受する地域住民に魅力的場に、将来的な拡大に対応する聖園と周辺人口をつなぐエリアとして考慮(ただし南以外)

2-5. まとめ

ルンビニ開発計画は、未開の地であったがゆえの交通等地域の開発と一体として捉えられており、それが丹下の関わる前段階に、1)ルンビニ聖園、2)巡礼者村、3)バイラワルンビニ道路、4)バイラワ空港拡張の4事業に整理されていた。そして、3,4)はネパール政府によって進められ、1,2)に外部支援が求められ、丹下が関わり計画の骨格が示された。この段階で僧院ゾーンが1)と2)の中間に追加された。

3. 1970年から1972年までの構想期 (第2期)

3-1. ルンビニ開発委員会の発足 (1970年2月16日)

国連本部にてネパール、アフガニスタン、ビルマ(現ミャンマー)、カンボジア、セイロン(現スリランカ)、インド、インドネシア、日本、ラオス、マレーシア、パキスタン、シンガポール、タイの13カ国から代表が会合し、ルンビニ開発のための委員会を設置すると同時に、ネパール政府と双方対等で互恵的国際間協力援助を呼びかけるべく、準備をする提案がされる。

3-2. 冊子

これは、1970年3月15日から大阪で開催された日本万国博覧会にて各国に支援を呼びかけるために国連開発計画局が編集し、ルンビニ開発委員会が発行した冊子である。英語版とともに日本語版も準備され(図7)、計画実現のための費用総額566万ドルを自発的な寄金によりまかなわれる予定とし、冊子の最後に仏教国や本計画に関心のある諸機関、個人から献金や現物による援助を呼びかけている。ウ・タントの写真付き新聞記事からも、日本での

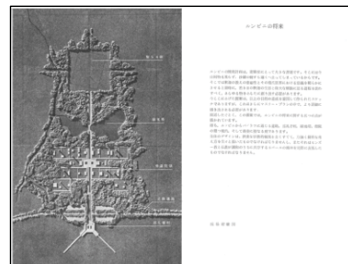


図7. 冊子一部抜粋 (出典: 文献10)



図8. 新聞記事 (出典: 仏教タイムズ⁶⁾
(1970年7月25日)

支援活動が積極的に行われたことが窺える(図8)。

計画図は、先のオルチン・松下レポートからの成果物であり、冊子には1) ルンビニバイラワ間道路、2) 聖園、3) 僧院、4) 緑地帯、5) 巡礼者村の5項目別に説明が加えられている。一方で、冊子や新聞記事には丹下の名前は一箇所も出てこない⁶⁾。

3-3. 第1回アドバイザリー会議

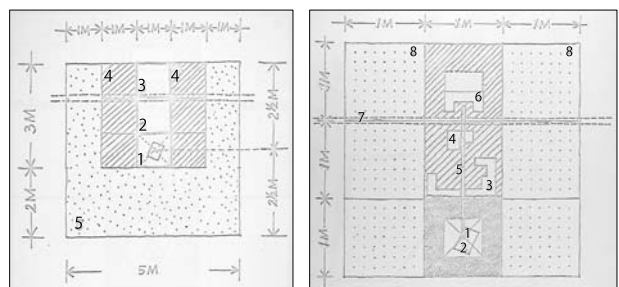
1971年8月9-11日、東京・経団連会館にて開催され、スリランカ、タイ、インド、マレーシア、ネパール、日本の6カ国代表が参加した。会議は、丹下らにより提出された計画案に対する意見交換と、ルンビニ計画へのデザインに対する事前の意見交換が行われ、条件が整理された(表4)。

表4. マスタープランへの条件整理

マスタープランへの条件となる4つの項目	
1)社会・経済面	ルンビニ計画は宗教・文化の場としてだけでなく観光地としても開発すべき、開発はネパール政府が提案予定の遅れている地域デザインを考慮すること 土地利用の基本は現状通りとする。徐々に農業経済の向上に移行し将来発展させる
2)文化・宗教	ルンビニは全人類を鼓舞し続ける場、仏教の教えを説く精神的中心部
3)歴史・考古	ブッダ誕生に関し願われた情報から発掘を進めるべき、発掘はプロジェクトと並行して行う ブッダに関する重要な発掘を今後のデザインに活かすことに合意、デザインは柔軟性必要
4)観光	国際線と地上・上空のカトマンズ・ボカラ・ルンビニ・カトマンズサークルを考慮、ブッダ聖地 サラナート・ブッダガヤ・クシナガラと地域内リンク今後課題、ヒマラヤ観光等と考慮必要

また、空間計画は以下4点でまとめられ(図9)、各ゾーンに対する詳細を表5に整理した。

- ・聖園、僧院、新ルンビニ村、バッファゾーンの4ゾーンで構成する。
 - ・聖園、僧院、新ルンビニ村で構成される1×3マイルの土地は、ネパール政府が取得する。(以下、国有地区)
 - ・上記両側1×3マイルは、将来本計画へ統合できるよう規制エリアとし、ルンビニ事業は合計9平方マイルとする。
 - ・現在農業用地として利用されている地域を5×5マイルのバッファゾーンとし、将来の居住域等の拡大防止のためにゾーニングによる建設規制の法的適用をネパール政府に要求し、現状の農地利用として維持する。
- これまでのバッファゾーンは、聖園や僧院を囲むように配置された植林(図5,7)と、3×3マイルの規制エリアを含む概念であった(図5)。しかし、1×3マイルの聖園や僧院の領域の広がりを見据え(表4)、周辺環境に現状の農地利用維持を目論むバッファゾーンを5×5マイルに拡大した。また、これまでバッファゾーンの一部に、既存の農村を屋外博物館的に残すことが想定されていたが(表3)、同様の内容に関する言及はなく後退した。



【凡例】
1. 聖園 2. 僧院ゾーン 3. 新ルンビニ村
4. 規制エリア 5. 農業ゾーン(バッファゾーン)
6. 仏教センター村 7. バイラワルンビニ・タワラワ道路 8. 規制エリア
1. アショカ王石柱 2. 聖園(中心部) 3. 僧院(小乗・大乘仏教)
4. 中央施設(博物館・会議室) 5. セントラルリンク(歩道・モール)
6. 仏教センター村 7. バイラワルンビニ・タワラワ道路 8. 規制エリア

図9. 左:5×5マイル、右:3×3マイルコンセプトスケッチ (出典: 参考文献11)

表 5. 主要 4 ゾーンの主な決定事項

主要4ゾーンに対する決定事項	
聖園	アショカ王石柱以外の物理的構造は解体・移築、物理的シンボルつくりしない、庭園の表現 聖園整備に向け、植林・水辺空間、動植物促進、発掘に関連する形式的庭園、道路・橋に よる歩行回避、養魚池、鳥・動物(孔雀・鹿)、その他サービス・文化的設備
僧院	多様な規模・位置に分割して計画、多様な建築群を共通の景観・フェンス等で一体感保 持、広告板や商業施設禁止し地域の美観保全必要、僧院と巡礼者村の中心部に商業 機能・博物館・会議施設等設置、汚染・騒音防止ためエンジン付乗物禁止
新ルンビニ村 バッファゾーン	拡大可能な条件で、観光客・巡礼者のための観光センターを含む 農業利用以外規制するゾーニングにより南端の聖園は十分に保護されるべき、聖園南端 部を堀など物理的隔離し保護、将来的な居住域拡大防止

3-4. マスタープラン大綱 1972 年

1972 年 3 月 21-25 日、第 2 回アドバイザー会議がカトマンズで開催された。会議の目的は、第 1 回会議を反映して丹下より提出された計画案について議論することであった⁽⁷⁾。この会議を踏まえた基本事項が最終案としてまとめられたものが本レポートであり、今後設計が進むこととなるマスタープランの大綱に位置づけられている。

大綱は、マスタープランへの 4 つの条件に基づく、聖園等の主要ゾーンへの指針に交通・公益施設案等を加味し(表 6)、5 つの図面(一部図 10)⁽⁸⁾と概算建設費が示された。1)世界からの多くの訪問者が、釈迦生誕の地で仏教の教えを通し、ともに世界人類の平和な社会へと繋がる精神性を備えた事業化、2)本計画とネパール国内計画との統合とバッファゾーンへの対応策、3)ティラウラコット等周辺遺跡含む発掘調査範囲拡大、以上 3 点が基本指針に加えられた。

表 6. 主要ゾーンへ追加された主な内容

ゾーン	構成	主な内容
聖園	聖園部	100mグリッドで発掘・デザイン・建設を柔軟に同時進行
	水辺	聖園保護、聖園次第で暫定案、清涼感
	森林	静寂感
僧院	僧院	建築群・各区分・舗装の調和、結節点に広場
	文化センター	博物館・図書館・会議室・研究室・管理事務室
	セントラルリンク	新ルンビニ村から聖園へ、キャンナルで静寂・リフレッシュ
新ルンビニ村 バッファゾーン	ルンビニセンター	観光客・巡礼者宿泊・公共・商業・交通等サービス施設
	キャンプ場	キャンピングカー対応、静寂性確保

図 10 に表現されている通り、聖園には、中央のアショカ王の石柱を取り囲むように円形の水辺が計画された。図 7 (オルチン・松下レポートに基づき造られた模型の写真)の段階では寺院ゾーンと聖園の間に水辺が描かれているが、聖園を取り囲むような大規模な水辺ではない。のちに丹下は、仏教のマンドラとの関係を言及している¹⁾が、これまでにはない幾何学的な要素が加わっている。

図 11 では、バッファゾーンと土手工事の項目が、大綱策定期になくなっている。構想期におけるバッファゾーンは、聖園や僧院を囲むように配置された植林と農地の部分に該当する 1×3 マイルの中央部分の一部と 3×3 マイルの規制エリアを含む概念であった。土手も位置は明確ではないが、聖園を洪水から守ることを目的に検討されていた。しかし、第 2 期の検討を経て、聖園や僧院の領域の広がりやバッファゾーンの関係は変化

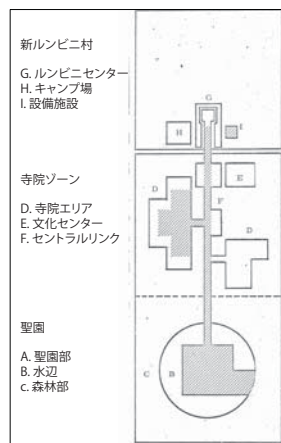


図 10. 大綱計画案
(出典：文献 12 図に加筆)

する。大綱では、バッファゾーンと土手工事は、聖園と僧院の項目に吸収され、3×3 マイルを対象とした具体的な事業の項目はなくなった。上述の変化により、1×3 マイルの実質的なプロジェクトの境界が明確なものとなった。

なお、聖園と僧院の事業規模は、バッファゾーンの追加以上に増額されており、セントラルリンクの充実もその一因と考えられる。1×3 マイルの規模やパイラワルンビニ道路からアショカ王の石柱が第一期で確定していたなかで、巡礼者の歩行距離を具体的に考えた結果としてセントラルリンクの拡充が図られたと推測される。僧院の規模は、第一期よりも詳細化・具体化しており、現地の河川の形状から建築敷地を確保しやすい西側の僧院規模が拡大した。

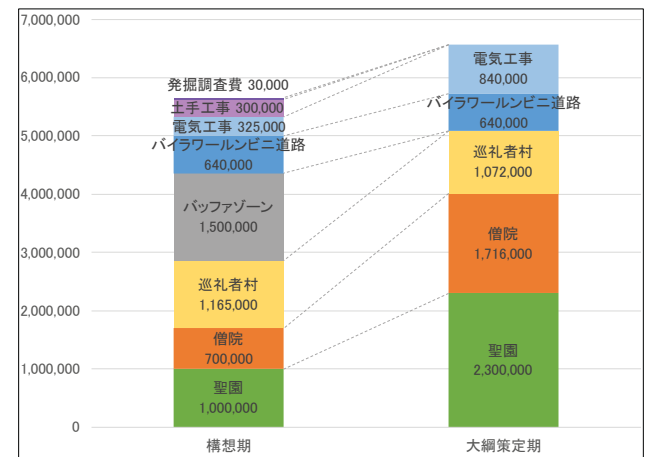


図 11. 構想期と大綱策定期の事業概算 (事業費: 単位は米ドル)

3-5. 第 2 期まとめ

第 2 期では、聖園や僧院の領域の広がりやバッファゾーンの関係が変化し、3×3 マイルから 5×5 マイルに拡大して、広大な農業エリアと両側の規制エリアが設定され、規模の面ではバッファゾーンは拡大した。バッファゾーンは、聖園や僧院を取り囲みながら 1×3 マイルのエリアにとどまらない広がりを持っていたが、ネパール政府による土地買収を前提に整備される聖園・僧院・新ルンビニ村(国有地区域)と、実質的な予算がない事業区域外に分割され、周辺農村の保全など第 1 期でオルチン・松下が構想した周辺との一体的な保全という方針は後退した。

4. まとめ

第 1, 2 期を通じた「ルンビニ開発計画」の変遷を図 12 に整理し、本稿で得られた知見を以下にまとめる。

一点目に、事業化構想期において、東西方向を地域の軸とする道路を新設し、空港近接のパイラワを拠点都市に、ルンビニとカピラバスツを包括したルンビニ地域のマスタープランが、河辺らにより策定されており、丹下プランは、ルンビニ部分の詳細計画として位置付けられる。

二点目に、アショカ王石柱を基点とし、1×1 マイルを聖園に、東西の提案道路により聖園と巡礼村とを分断して聖園を神聖な空間とする点はボラコの構想であり、1×3 マイルの設定および提案道路との関係は、1969 年案でまとめら

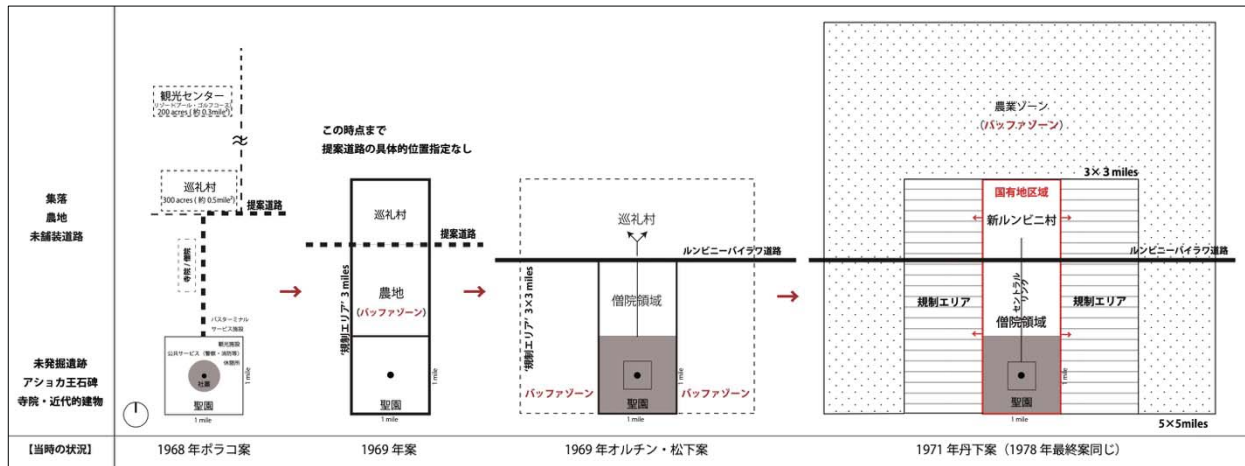


図 12. 1972 年大綱までの「ルンビニ開発計画」の変遷

れた。丹下プランは、それらを継承した位置付けにある。

三点目に、当初は聖園を守る意味で設定されたバッファゾーンは、1 マイル四方の聖園のなかの植林や水辺の狭義の概念とともに、1×3 マイルの将来拡張に備えた制限エリア、地域の将来発展を踏まえてそれらの緩衝帯としての 5×5 マイルの広大な農業ゾーンを捉えた広義の概念を含むものに変化した。一方、全体の計画枠組みは、政府による土地買収を前提に整備される聖園・僧院・新ルンビニ村（国有地区）と、実質的な予算がない事業区域外に分割された。

補注

- (1) “A comprehensive report on the Lumbini Development Project”は、見つけれなかった。ただ、UN Archives では、同時期の本レポートが所蔵されており、内容からも抜粋版であると考えられる。
- (2) UN Archives (1969 年 9 月国連内部資料)にはオルチンの履歴書が添付されており、1923 年生まれから、ミッション実行時は 46 歳である。松下へのヒアリング (2011 年 2 月 4 日 15 時から松下の自邸にて) から、オルチンはインド専門に発掘調査を進める当地域をよく知る専門家であり、初めての訪問である松下が頼りにできた存在であり、松下は多忙を極める丹下の代行としてミッションに参加したことがわかった。松下はミッションの後に事務所を離れており、その後本計画に関わることはなかった。
- (3) 松下へのヒアリングから、新たな僧院ゾーンの提案は、松下が抱いた東本願寺などで見られる寺院本殿と僧房の建造物群を想定したもの。「それぞれの国の事情に従って、そこに来て修行をして帰るといふものを作らないかと思った。それが、お寺の並びになって、素晴らしくなるのではないかと考え、また「ハイウェイとアショカ・ビラーを結びつけて軸を作ろうという、丹下の (他の計画での) 考え方を踏襲した」事がわかった。
- (4) オルチンの教え子で、現在筆者らが参画する UNESCO プロジェクトにて協働する英国ダラム大学考古学部 Robin Coningham 教授より提供されたもの。メモには、「PLANNING 1. ROAD ACCESS 2. SACRED GARDEN 3. MONASTIC AREA 4. BUFFER ZONES 5. 解説不明」「1ST STAGE, 2ND STAGES, 3RD STAGES」等の記述があった。ゾーン設定とそれに対する工事着手段階設定など、検討された様子が窺える。
- (5) 1970 年 7 月 25 日仏教タイムズ、UN Archives。BUDDHIST TIMES から国連に送付されたもの。
- (6) 丹下と本プロジェクトの関係について、1969 年から 1973 年まで丹下事務所所属した鳥栖智夫の回顧に、背景を窺う事が出来る。(豊川斎藤

(2013), 丹下健三と KENZOTANGE, オーム社, pp.477-478, 2013.7)。「丹下先生は、『ルンビニ復興計画』をどうしても実現させたいということで、考えに考えた結果、『国連は経済的に裕福な日本に金を出してほしいから日本の建築家に話を持ってきた』ということに気が付いて、政府に支援を求めたものの、政府は知らないふりをしていたんです。」

(7) 参考文献 12 に記載された内容を参照した。

- (8) AN OUTLINE PLAN OF THE LUMBINI PROJECT AREA, 1:5,000, A PLAN FOR THE DISTRIBUTION OF UTILITIES, 1:5,000, A SCHEMATIC DESIGN OF THE SACRED GARDEN, 1:2,500, SILHOUETTES OF THE MAIN BUILDINGS, 1:1,000, A SCHEMATIC MODEL, 1:2,500

参考文献

- 1) 丹下健三 (1997)、一本の鉛筆から、日本図書センター
- 2) 小野啓子 (1990)、開発計画の現状と問題、ネパール・ルンビニ開発計画 (1967~) を通して、1989 年度東京大学大学院建築学専攻修士論文
- 3) Fenghao Li (2012), A study on the chronological transition of Lumbini Development Project, Nepal: Focus on planning and implementation process of Kenzo Tange's Master Plan and the management of cultural heritage, 2011 年度東京大学大学院都市工学専攻修士論文
- 4) Takefumi Kurose, Fenghao Li, Nattapong Punnoi and Shulan Fu (2011), Development Control for Cultural Heritage Site and its Surrounding, A Case Study on the Lumbini Master Plan by Kenzo TANGE, Asian Planning School 11th International Congress, APSA 2011 Selected Papers, pp.351-358
- 5) Tomoko Mori and Takefumi Kurose (2015), Re-understanding of the Lumbini project from the regional scale, focusing on the preliminary stage before Kenzo Tange's Master Plan, Sustainable urban development: opportunities and challenges, pp.32-42
- 6) Susumu Kobe, et al, (1968), The Report of the United Nations Mission for the development of Lumbini, 18 December 1967 - 9 January 1968, UN Archives
- 7) J.C. Pollaco (1968), Development of cultural tourism: Nepal - (mission) April-May 1968, UNESCO Digital Library (accessed 25 April 2020)
- 8) A Brief on the Lumbini Development Project, April 1969, UN Archives
- 9) F. R. Allichin and K. Matsushita (1968), the Report of the United Nations Mission for the development of Lumbini, 18 December 1967 - 9 January 1968
- 10) 国連開発計画局編 (1970), LUMBINI, 釈迦生誕の地, ルンビニ開発委員会
- 11) UN (1971), LUMBINI DEVELOPMENT PROJECT Report of the Advisory Panel, UN Archives
- 12) Kenzo TANGE & UTREC (1972), Final Outline Design for Lumbini, 1972.7